
忍魂（忍たま＆銀魂）

近衛 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍魂（忍たま&銀魂）

【Nコード】

N7120R

【作者名】

近衛 陸

【あらすじ】

忍術学園に銀時、神楽、新八が小さくなってやってきた。

さてさてこれからどうなることやら

絶対必読の段

毎度お馴染み近衛陸です。

今回はなんと…コラボ小説3つ目。

銀魂と忍たまのコラボ小説となっております。

えっと…今回の連載につきましてはいつものコラボ小説とは違う点があります。

まず、はじめに万事屋3人の年齢が同じになります。…1年生として入れるのもちろん10才です。

銀時は子銀をイメージして下さい。

ちなみに3人の力、能力、体力などは10才の頃まで退化しております。

ですので、銀時や夜兎の神楽は6年生と同じくらい。新八は1年生と同じくらいになっております。

なので、先生方とどっこいどっこいの強さを持つ方々には適いませんであしからず。

それでは、始まります♪

第1訓 プロローグの段（前書き）

始まりました。

ダメダメですが…よろしくお願いします。

（誤字見つけたので修正しました）

第1訓 プロローグの段

今日も何も無く平和な万事屋銀ちゃん。

中ではいつも通りグダグダと過ごす三人組が居た。

1人は天然パーマの銀髪に死んだ魚のような目をしている万事屋銀ちゃんのオーナー坂田銀時だ。

もう1人は…酢昆布を口に加えた可愛らしいチャイナ服の女の子神楽である。

最後の1人は、メガネであつた。

「ちよつと待てエエエ!!!メガネって僕一言オオオ!!!」

三人はいつも通り暇そうにテレビを見ていた。

「え?無視?僕…無視なの?」

新八はじつとテレビを見ている神楽に話しかけた。

「なんで無視されて話しかけなくちゃ…ならないんですか。僕は知りませんよ!!!」

「オイオイオイ、新八大人になれよ。ナレーションはナレーションでしかないんだから好き勝手に喋れるわけねえだろ?」

「え?そうなんですか?銀さん…」

当たり前だろ。いいから早く始めろや、この童貞がツ!!!っとナレーションは思った。

「誰が童貞だアアアア！ってか喋ってるじゃないですか！！」

新八は何故か叫ぶ。誰も何も言っていないのに…流石に銀時と神楽は心配になり話しかけた。

「新ハイ…どうしたネ？とうとう頭可笑しくなったアルか？」

「新八…ストレスがあるなら銀さんに言えよ」

二人の優しい言葉に新八は涙を流し始めた。そして決意する。僕は一生童貞でいようと…

「流さねえよ！！誰が決意するかアアアア！！」

新八は再度大きな声で叫んだ。

さて…そろそろ真面目に話を進めようと思ったその時神楽が首を傾げた。

「銀ちゃん。このテレビなんか変アル」

銀時は神楽が言った通りテレビを見ると眉を寄せた。テレビの画面は真っ白で真ん中に何やら文字が書いてある。

「なんだこれ？えっと……異世界旅行に行きたい者は下に書いてあ

る電話番号に電話しろ…だとよ」

「何でしょう？何かの宣伝でしょうか？」

銀時の読んだ言葉に首を傾げる新八。そんな新八を見て銀時はきっぱり言った。

「わかんねえけど…こんな怪しいのに電話する奴居ねえだろ」

「それもそうですね」

銀時と新八は笑いながら言った。しかし聞こえて来たのは…

「もしもし私、旅行行きたいアル」

電話を掛けている神楽の声。銀時と新八は急いで神楽の方を振り向いた。

「か、神楽ちゅわーん！！何してんの？何してんの？」

銀時が慌てて言うも時はすでに遅く、テレビの方から了解と言う声が聞こえた。

そしてテレビは眩い光を放つ。万事屋の居間はその光に包まれた。光が消えた後の居間には三人の姿が消えていた。

第2訓 トリップトリップの段（前書き）

出来ました。

ちょっとキャラが掴めてないのでかなり変かも…

それでは、どうぞ

第2訓 トリップトリップの段

ここは忍術学園である。今は長期夏休み中で生徒や先生はほとんど居ない。

居るのは、ヘムヘムや学園長や食堂のおばちゃん。そして僅かな先生方である。

生徒達が居なく静かな忍術学園。時々学園長室から囲碁を嗜む音が聞こえてくる。

パチッ…パチッ…

「ち、ちよつと待った」

この部屋の主大川平次渦正…学園長は今日で何度目かの待ったをかけた。

しかし学園長の囲碁の相手忍者のように青い頭巾を付けた忍犬ヘムヘムは首を振る。

「なっ！？待ってくれてもいいじゃろ！！」

「ヘムッ！！」

ヘムヘムは再度首を振った。どうやら待つ気がないようだ。

学園長はムツと眉を寄せ立ち上がる。ヘムヘムも警戒するよう学園長を見た。二人の間に不吉な空気が漂う。

つとその時、ガシャツガシャツガシャーン！！とけたたましい音が

鳴り響いた。

どうやら学園長の部屋の屋根が抜けて何かが落ちてきたようだ。

「なんじゃ？なんじゃ？」

「へムへム？」

二人は驚きながらも何が落ちてきたのかと音のした方向を見た。
するとそこには10才くらいの3人の子供が気絶して倒れていた。
一人は銀髪の天然パーマの少年。もう一人はメガネをかけた黒髪の少年。最後の一人は桃色の髪をお団子にした少女だった。

「子供？…へムへム！！とりあえず新野先生を呼んでくるのじゃ！！」

「へムッ！！」

へムへムは頷くと保健室へと走って行った。
残った学園長は心配そうに3人の子供を見つめた。
そして、音を聞きつけてやってくるだろう。先生方とへムへムが連れてくる新野先生を待った。

第3訓 子供化とか…マジでかの段（前書き）

1ページずつだとサクサク投稿できるなア…

ちよつと楽♪

第3訓 子供化とか…マジでかの段

銀時は辺りを見渡した。何もない真っ白な空間。銀時は不安に襲われる。そのとき…後ろから懐かしい声がした。

「銀時」

「ッ！？」

銀時は驚き後ろを振り向く。居たのは銀時の大切な人…吉田松陽だ。

「銀時、大きく立派に育ちましたね」

松陽は銀時を見つめるとにつこりと微笑んだ。銀時は嬉しそうに手を伸ばす。しかし届かない。

「先生？」

「…これから何があっても…負けずに頑張るのですよ？」

松陽は銀時に言いながら遠ざかって行く。

「先生？…先生！！」

銀時は慌てて追いかけようとするが足が何故か動かない。銀時は焦った。

「先生！！…松陽せんせえええ！！」

銀時はガバツと起き上がった。

「ゆ、夢か…… ってかここはどこだ？」

キヨロキヨロと辺りを見渡す銀時。周りに棚が有り、薬やら包帯やらが入っていた。どうやら万事屋ではなさそうだ。ふと銀時は隣に寝ている2つの気配に気づいた。一人は神楽。もう一人は……新八だろうか？

「新八なんか縮んでねえ？」

銀時は寝ている新八をじっと見つめた。よくよく見ると神楽も少し小さいような……

「？…とりあえず起こしてみるか」

銀時は新八を起こそうと手を伸ばした。そして止まる。

「あれ？あれ？いやいやナイナイナイ」

銀時はナイナイ言いながらぶんぶんと首を振った。そして再度自分の手を見る。

「いやいやいや、ナイナイ。これはないって」

銀時は次に立ち上がった。何故か目線が低い。銀時は冷や汗ダラダ

ラで鏡が無いか探した。

鏡は見つからなかったが顔がうつりそうなピカピカの器を発見した。
銀時は恐る恐る顔をうつしてみる。

「な、な、なんじゃこりゃアアアア!!」

銀時は大声で叫んだ。あまりに大きな声で叫んだせいか二人は跳ねるように起き上がった。

「な、なんですか!？」

「何アルか!?! ってかお前ら誰ネ」

神楽は隣の新八と器を持ったまま愕然としている銀時を見て警戒するよう言った。

「へ? 何言ってるの? 神楽ちゃん」

「なんで私の名前知ってるネ!! ストーカーアルか?」

神楽が二人を交互に睨みつけた。新八は状況を把握してない。銀時は新八に近付くと器で顔をうつした。新八の目が見開かれる。

「ちょ... え? これ... 僕ウウウ!!」

新八は銀時よりも大きな声で叫んだ。

第4訓 い、犬が二足歩行してるウウウー!!の段

「ええ？銀ちゃんと新八アルか!？」

神楽が驚いてマジマジと二人を見つめた。

新八が叫んだ後神楽に子供になったことだけ言ったのだ。

「それにしてもどうしてこんなことに…っというかここ何処でしょう?」

「忍術学園じゃ」

新八が呟くとそれに答える声が聞こえた。そして引き戸が引かれ二人と一匹の犬が入ってくる。学園長と新野先生、そしてへムへムだ。三人は眉を寄せた。

「あ、あんたらは?」

銀時の問いかけに眉を寄せる学園長。

「わしか?わしは忍術学園の学園長…こちらは新野先生。そしてへムへムじゃ」

「ど、どうも…」

「へムッ」

へムへムと新野先生は学園長の言葉にコクンツと頷く。三人はへム

へムをじつと見つめた。

（何あれ？へムへムってしゃべった？）

（犬が立ってる…）

（可愛いアルなァ…）

三人の考えてることは三人とも違っていた。

「…あつ、あの…忍術学園って？」

新八がへムへムを見ながらも聞いた。

それに学園長はコホンッと咳払いをした。

「うむ、それについては…わしも聞きたいことがある。場所を変えて話しても大丈夫かのお？新野先生」

「ええ。怪我もなく至って健康でしたし、大丈夫ですよ」

学園長の言葉に新野先生は頷いた。

「では、ついて来るんじゃない」

学園長とへムへムは後ろを向いて歩き出す。銀時たち三人は顔を見合わせるについていった。

学園長室につくと、まず目に入ったのは壊れている屋根だ。三人はじつとその屋根を見つめた。すると学園長が自分の定位置に座り口を開いた。

「不思議か？そこから君らが落ちてきたんじゃないぞ」

『え？マジでか』

三人は声を揃えて驚いた。そんな三人を座るように促する学園長。三人が座るとヘムヘムがお茶を置いた。

「あつ、どうも…」

「ヘム」

銀時が三人を代表して礼を言うとヘムヘムはどういたしましてっと言っふうに声を上げる。

「さて、君らが何故落ちてきたのか…話してくれるかのお？」

第5訓 なんやかんやで物語は進むの段（前書き）

更新
…

最近サブタイトルにほんと悩み中…

第5訓 なんやかんやで物語は進むの段

三人は少し悩むと学園長に説明を始めた。

学園長が悪いやつには見えないと銀時が判断をしたからだ。ちなみに説明したのはトリップしたということだけ…身体が縮んだということは一切言っていない。

「うむ。なるほど…そんなことが」

学園長は三人が説明する言葉を時々驚きつつ聞いてくれた。

「なるほど…事情は分かった。これからどうす…そうじゃー！三人とも忍者にならぬか？」

『に、忍者！？』

三人は突然の学園長の言葉に目をパチクリとさせた。

「うむ。ここは忍術学園、忍者の学校じゃ。…せっかくトリップ？とやらをしたのじゃ。楽しむのが鉄則じゃろ？のう…へムへム」

「へムへム」

学園長は楽しそうにへムへムに言った。へムへムもコクコクと頷いた。

「銀ちゃん！！忍者だって、楽しそうアル」

「ま、待って下さい！！僕たちお金ないですし…学費払えませんよ？」

神楽がキラキラと瞳を輝かせた。そんな神楽を見て新八がきつぱり言った。

「分かっておる。もちろん…学費、その他もろもろは免除とする」

「免除…オイオイオイ、本当にいいのかよ？」

学園長がきつぱりと言うと銀時は眉を寄せた。すると学園長はゴホンと咳をした。

「もちろん免除には、条件がある。わしの暇つぶしや思い付きに付き合ってくれたらじゃ」

三人はその言葉に顔を見合わせた。

「まあ、それぐらいなら…」

「ええ。そうですね」

「どんとこいアル！！」

銀時、新八、神楽は大丈夫だろうとその条件を呑んだ。いつか後悔するとも知らずに…

「よし、決まりじゃ。それでは、休みが終わり次第銀時と新八は一年は組に…神楽はくのいちに入れるとしよう」

「くのいち？くのいちアルか？」

神楽はキラキラと瞳を輝かした。しかし、銀時と新八が声を高々にして言った。

「ちょっと待てエエエ！！」

「そうです！！待て下さい！！」

「な、なんじゃ！？」

二人の言葉に学園長は目をパチクリさせて驚いた。

「神楽を俺たちと同じ組に入れてくれ！！」

「そうですよ！！神楽ちゃんを一人に…一人にするなんて…」

二人の言葉に学園長は感動した。不安がってる少女を一人にさせまいと頑張る二人の姿に。

「…例外じゃが…二人の気持ちには負けた。…神楽も一年は組とする」

「ぎ、銀ちゃん…新ハイ、そんなに私のこと心配してくれるアルか？」

二人の言葉に神楽は少し嬉しそうに聞いた。すると銀時と新八はき

っぱりと言った。

「当たり前だろうが！銀さんは（学園が壊されないか）心配で心配で夜も眠れません」

「そうだよ。神楽ちゃん…僕だって神楽ちゃんが傍に居ないと（被害状況が分からなくて）不安だしね」

「銀ちゃん。新ハイ…」

神楽は感動して二人に抱きついた。（）の中身の見えない学園長とヘムヘムも感動のあまり暫く泣いた。

第6訓 話し合いは大切な段（前書き）

最初に言います。

何をしたかったのか分からないくらいグダグダです！

第6訓 話し合いは大切な段

あの後…三人は学園の案内をへムへムにされて歩き回った。

そして、今はへムへムと別れて与えられた寮の部屋にいる。もちろんんなんかんやと言い神楽とは同じ部屋にしてもらった。

「それにしても…これからどうすれば…」

新八は部屋に入ると深刻そうに呟いた。

「どうするって…立派な忍者になるんじゃないアルか？」

「いや、神楽ちゃん…僕が言いたいのはそのじゃなくて…どうやってら帰れるのかと言うことだよ」

神楽の楽観的な言葉に新八はため息をつく。
そんな新八に神楽は眉を寄せる。

「なんだよ。それならそうと見えヨ。駄眼鏡」

「いやいや、僕きちんと言ってたから！！ってか駄眼鏡言っつなアアアア！！」

神楽と新八はギャーギャーと言い争いをし始めた。銀時はその光景を見つめるとガシガシと頭を掻く。

「はいはい。ほら、ストップ！！…ったく…お前等は」

銀時はため息を付くと二人の言い争いを止めた。いつもなら銀時と神楽が言い争って新八が止めるはずなのだが…身体が縮んでしまつたせいだろうか？思考が幼稚くなっていた。

銀時に止められると二人は顔を見合わせると叱られるのかと罰惡そうに銀時を見つめた。

銀時は眉を寄せると二人の頭をポンポンと撫でる。

「ほら、話し合いの続きすんぞ」

銀時の言葉に二人は嬉しそうに頷き話し合いを再開した。

話し合いは暫く続いたが、一向に解決策は見えてこない。

「とりあえずだ。やっぱりこのまま忍者勉強しながら情報集めるってことでいいか？」

「はい」

「もちろんネ」

話し合いの結果状態維持をすることになった。ただトリップしたなどは学園長も言った通りあまり言わない。そして身体が縮んだ等も内緒ということに決まった。

「よし、決定な！…じゃあ…そろそろ腹もすいたことだし飯食いにいこうぜ」

銀時が立ち上がると二人も立ち上がった。三人は食堂へと向かった。

第7訓 やべえ…これヤバいくらい美味いんだけど…の段（前書き）

お待たせいたしました♪

一応完成です…なんか変な感じですが！

第7訓 やべえ…これヤバいくらい美味いんだけど…の段

三人はとても美味しそうな匂いのする食堂へと入った。食堂に入ると割烹着を着た女性が料理をしていた。三人がそれを見つめていると料理をしていた女性は三人に気づいたのか顔を上げた。そしてゆっくりと近付いてくると三人を交互に見つめた。

「学園長先生から話は聞いてるよ。色々大変だったようだねえ」

「え…えっと…」

新八は目をぱちくりさせると女性はクスツと優しげに笑った。

「おばちゃんでもいいよ。みんなそう呼んでるからねえ」

「じゃあ、おばちゃん…話ってどこま…」

「おばちゃん…！私お腹ペコペコヨ」

「おばちゃん…なんか甘いもんねえ？」

新八が尋ねようとするのと神楽と銀時が手を上げて遮るように言った。食堂のおばちゃんは…甘い物はないけどもうすぐ出来るよつと言つとまた奥へと入っていった。

神楽と銀時はそれを見ると近くのテーブルに座り料理が出来るのを今か、今かと待った。

新八も二人の隣に座った。そしてため息をつく。

「銀さん…いいんですか？どれくらい知ってるのか聞かなくて…」

「いいんじゃない？」

「そんなことよりご飯アル！！」

新八が二人に聞くと二人とも興味なさげに返した。新八は眉を寄せ
るもまあ、いつかと…二人に習って料理を待つことにした。

しばらくするととっても美味しそうな料理が出来た。三人はごくつ
と唾を飲み込む。するとおばちゃんが杓文字を持ってきつぱりと言
った。

「お残しは許しまへんでエエ！！」

「……いっただきまーす！！」「…」

三人は一瞬キョトンとするも両手を合わせパクと一口食べた。

「うめえ…」

「おいしい…」

「めちやくちゃおいしいアル」

三人はあまりの美味しさに一瞬止まった。そしてこんな美味しいも
の取られてたまるかとガツガツと食べ始めた。

「ねえ。おばちゃん…おかわりしても良いアルか？」

早々と食べ終えた神楽はおばちゃんを見つめた。

「もちろんだよ。たくさん食べなよ」

「おかわりアル!!」

「俺も」

「僕も」

おばちゃんの言葉に神楽は茶碗を上げた。銀時と新八も茶碗をあげる。おばちゃんにはっこり笑いながら茶碗にご飯を大盛りについでくれた。

三人は遠慮なく腹いっぱいにご飯を食べた。

第8訓 部屋に知らない人いるとびつくりする…それが化け物なら尚更の段

三人はご飯を食べ終わると部屋へと向かった。

「あー、食った食った」

「美味かったネ」

「ほんと美味しかったですよ……」

三人は満足気に寮の襖を開けた。そして中を見ると勢いよく閉めた。中の人物が何かを言ってるがひとまず無視だ。

「なんですか？あれ……」

「やべえ、食べ過ぎて幻覚見えちゃった……」

「化け物ネ！！化け物いたヨ」

三人は口々に言った。銀時に至っては不思議なことを言っている。すると勢い良く襖が開いて中の人物が出てきた。

「誰が化け物！？伝子さんって呼んでちょうだい」

中に居た人物…伝子さんはきっぱり言々と三人にウィンクをした。

「ぎ、銀ちゃん…助けて…吐きそ…うおええ」

「ギャー！！神楽ちゃん吐かないでエエエ！！銀さんなんとかしてください」

「無理無理無理、銀さんにも出来ることと出来ないことがあるから！！」

三人は大ダメージを受けたようだ。ギャーギャーと騒ぐ三人に伝子さんは眉を寄せた。そして失礼？な三人に向かって拳を落とした。

ちなみに伝子さんとは、忍術学園一年は組の実技担当教師・山田伝蔵の女装姿である。

しばらくして落ち着いた三人は仲良かったんこぶを頭にこしらえ並んで座ると何故部屋に居たのかを聞いた。ちなみに山田先生が女装をしていたのは待つてゐる間暇だったからだそうだ。

「うむ、学園長から一年は組に転入すると聞いて必要な教科書を届けに来たんだ」

山田先生はそういうとわきに置いてあつた3冊の本を三人に手渡した。

「忍たまの友？」

「なんか夏休みの宿題みたいな名前だな」

新八が表紙を読むと銀時がボソツと呟いた。神楽は興味津々に教科書を見つめている。

山田先生は三人を交互に見ると忍たまの友の扱い方の注意を話していく。

どうやら忍たまの友は無くしたり、簡単に人に見せたりしてはいけないようだ。

「……っということだ。銀時、新八、神楽…分かったか？」

山田先生は説明し終わると三人を見た。三人は一応分かったのか頷いた。すると山田先生は立ち上がり出て行こうと襖を開けた。

「あつ、明日は夏休み最終日だから…授業始まるまでに少しは教科書見といたほうがいいぞ」

山田先生はそういうと三人の部屋から出て行き、自分の部屋に向かった。

（どんな子たちかと思えば…良い子たちじゃないか。それにしても…銀時…まだ子供なのにあの目。学園長から戦孤児だとは聞いていたが…大変だったんだろう）

山田先生は部屋に着くまでそんなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120r/>

忍魂（忍たま＆銀魂）

2011年5月21日11時53分発行